

仙台周辺の古刹めぐり

17. 11. 28～29

齋木 敏夫

東北新幹線白石蔵王駅で降りると蔵王連峰が雪化粧をして我々を迎えてくれた。改札口に 12:00 に 25 名が集合し、荘内交通の貸切バスに乗り、旅が始まった。

昼食「やまぶき亭」

お城の北側にある商家造りの建物を改装した店で、喉ごしのよい温麺(ウマ)と刺身、茶碗蒸し等を食べ、ビールを飲みながら味わった。温麺は小麦粉を塩水でこねて造るため、舌ざわりがよく消化もよく胃にやさしく、名物となったそうだ。お城の北側の外堀の役目をした沢端川の清流と梅花藻(ハカモ)を眺め、武家屋敷に向かって歩いた。

片倉家中・旧小関家

簡素な切妻造、板葺き屋根の棟門をくぐり、1730 年建築の寄棟造、茅葺の建物の台所口から中に入った。上手の前面にある座敷は江戸時代の建物には珍しく天井が床刺(トコザシ、天井の竿が床の間に向かっていること)となっている。その裏側に「なんど」をとり、これら二室の下手に広い一室構成の「ちゃのま」があり、極めて簡素な間取の家だ。座敷以外は天井がなく、板敷だ。

見学を終え、お城に向かって歩いた。厩口門の跡地にある案内板には写真が掲示されており、上部に珍しい眼象窓(ゲンゾウヨウマド)が付いていた。鎌倉円覚寺山門の二階部分にもこの形式の窓がある。

白石城歴史探訪ミュージアム

館内に入り、白石城と周辺の城下町を復元した 500 分の 1 の模型や片倉家ゆかりの甲冑、刀剣、火縄銃等を見学した。札幌市白石区の前身は明治維新後に当地の人々が北海道に渡り、荒地を開墾し、礎を築いた村だそうだ。その後立体用の眼鏡をかけて 3D の映像を見た。内容は大坂夏の陣(1615 年)で敗北を覚悟した真田幸村が二代片倉重長の人柄を信じ、娘阿梅(オメ)達を託したことに始まり、凱旋した重長を父景綱が戦で先陣を切り、活躍したことを褒めずに将たるものは先陣を務めるものではないと諫める場面で終わるものであった。立体感あるもので大きな石が転げ落ちる場面では思わず顔を動かしていた。

白石城天守

白石城(別名:益岡城、柵岡城)は平山城で仙台藩の南の要衝であり、関ヶ原の戦い後明治維新迄の 260 余年間、伊達家の重臣片倉氏の居城であった。1591 年豊臣秀吉は伊達氏の支配下にあったこの地方を没収し、会津若松城とともに蒲生氏郷に与えた。蒲生氏家臣蒲生源左衛門は白石城を築城し城主となった。1598 年上杉領となり、上杉氏家臣甘糟清長が白石城の再構築を行い居城した。1600 年関ヶ原合戦の直前に伊達政宗は白石城を攻略し、この地方は再び伊達領となり、伊達氏家臣片倉小十郎景綱によって大改修がなされた。元和の一国一城令以後も仙台藩は仙台城と白石城の二城が許され、明治維新には奥羽越列藩同盟がこの城で結ばれ、上野寛永寺の法主輪王寺宮が盟主となった。現在の三階櫓は平成 7 年に資料に基づき木造で復元された。石垣は野面積(ノヅラヅミ)、櫓に向かう石段の石も丸く削られ、敵が攻めにくいように滑りやすく加工してある。櫓内でのボランティアガイドの説明によると柱他の材木は吉野檜、化粧材は青森ヒバや山陰地方の松や杉等の国産材が使用されているそうだ。

日本古来の建築様式に基づき数百年の歳月に耐え得る造りであるが建築基準法では耐震が義務付けられ、床下に耐震盤が設置してあるそうだ。階段は一間幅の間にもうけられ急角度となっている。戦後の木造復元天守閣では高さ、広さとも日本最大級を誇っている。三階の高欄からは白石城下が一望でき、蔵王連峰は残念ながら雲がかかっていた。駐車場まで歩き、バスに戻った。

当信寺

二階櫓門づくりの山門(国登録有形文化財)は元白石城の東口門であったが、明治20年の東北本線の開通に伴い、当信寺へ移築されたもので2階中央の表と裏それぞれに大きな眼象窓が一つずつ付いている。阿弥陀如来(市指定)をご本尊とする浄土宗の寺院、住職不在で阿弥陀如来は拝観できなかった。本堂(登録有形)にお参りして墓地に行った。真田幸村の遺児で二代片倉重長の後室となった阿梅とその弟大八(ダイチ)が埋葬されており、如意輪観音のような阿梅の墓石とその隣の大八の墓を拝んだ。その後バスに乗り、四号線バイパス経由で東北動車道に入り、秋保温泉に向かった。

秋保温泉の歴史

旧石器時代に始まり、大和政権が樹立し、やがて多賀城が設置されると国府に派遣されてくる官人たちの保養・遊樂の地として栄えた。温泉の湧き出る湯元を中心にして小集落が形成され始めた。坂上田村麻呂や慈覚大師といった歴史的人物の来郷をきっかけに建立されたといわれる寺社や遺跡も多く残されている。藤原氏の奥州統一と栄華の時代を経て関東武士団を中心に地頭といわれる領主たちが定着し、やがて戦国武将として活躍していくことになる。この頃秋保氏という土着の地方小領主が興り、長く秋保郷を支配した。戦国時代には伊達氏(政宗以前)に従属、伊達政宗が岩出山に本拠を移す頃には、山形最上氏に対する二口峠の境界警備という重責を担うとともに、藩政に功績を挙げていた。政宗は仙台へと城下を移し、秋保郷は仙台藩の直轄領となる。七代藩主伊達重村のときには秋保氏23代目の秋保氏盛が奉行(家老に相当)に抜擢され、一躍千石を賜り、秋保氏の名声を高めている。明治になると二口峠の改修整備を行ない、峠越えをより楽にさせたことで人々を活気づかせ、秋保郷は往来する人馬で賑わいその最盛期を迎えた。昭和63年に仙台市と合併し、秋保温泉や秋保大滝といった自然を主体とした観光産業を再構築し、現在に至っている。

ホテルクレセント(秋保温泉)

4時半ころ到着、部屋は3階、荷物を降ろし、夕食前に温泉に浸かり、旅の疲れを癒やした。夕食は6時から二階の部屋で飲み放題のコース、久し振りに参加した渡辺前主宰の乾杯発声で宴会が始まった。各自自己紹介をして友好を深めた。

二日目

朝食前に再び温泉に浸かり、玄関から素晴らしい日の出を見た。6時50分から和食処「やわらぎ」でバイキングスタイルの朝食、好みの品を皿に取り、美味しくいただいた。窓からは名取川の溪流が流れているのが見え、木々が生い茂り、良い眺めであった。8時 バスはスタートし、二日目の行程が始まった。

大崎八幡宮

駐車場でバスを降り、北参道から境内に入った。入り口の鳥居の扁額の八幡宮の八の字が鳩であるのは鶴岡八幡宮と同じだ。参道の紅葉が朝日に映え、きれいだ。創建は坂上田村麻呂が宇佐八幡宮を胆沢城に勧請し、鎮守府八幡宮と称したことに始まり、室町時代に奥州管領であった大崎氏が本拠地(現大崎市)に遷したため、大崎八幡宮と呼ばれるようになった。

大崎氏改易後伊達政宗が1607年に造営し、仙台城の鬼門に当たる現在地に遷座した。長床(重文)は元来修験道等における拝殿をさすが、この建物は中央が通路になっている「割拝殿」の形式で類例は石上神宮摂社出雲建男神社拝殿(国宝)、鞍馬寺の由岐神社(重文)に見られる。建築様式は社殿とは対照的に簡素な素木造りで入母屋造、柿(コケ)葺、前後に唐破風の付いた建物だ。長床のそばに高野槇の古木がある。高野槇は天皇陛下の孫悠仁(ヒルト)様の御するしで当地が北限のようだ。本殿・石の間・拝殿(いずれも国宝)は修理中では見えないが女性の神官が丁寧に説明してくれた。入母屋造の本殿と拝殿とを相の間で繋いだ石の間造りであり、後に権現造りと言われる建築様式だ。入母屋造、柿葺、正面に千鳥破風を付け、向拝には軒唐破風を付けている。外観は長押上に鮮やかな胡粉極彩色の組物や彫刻物を施し、下は総黒漆塗りと落ち着いた風格を現している。拝殿内部に法親王と将軍の間がある。日光東照宮をまねて後で造られたそう。日光は寛永寺を兼ねて輪王寺の宮が法主であり、その部屋があるのはわかるが当社にそれを造った理由がわからない。紀州根来の彫刻師 刑部(オカベ)左衛門国次は当社殿と瑞巖寺に見事な彫刻を施している。臺股に「にらみ猫」が彫られている。後に日光東照宮に同じく臺股「ねむり猫」の彫刻を残しており、名工と云われた。伝左甚五郎の彫刻はあちこちに見られるが刑部左衛門の左をとって最初に左甚五郎と呼ばれたのではないかというユニークな説を言われたのには驚いた。千鳥破風の下の鶴についてはどういう意味で彫られたのかは不明だと言っていた。次に境内を歩き、かつて別当寺であった龍宝寺に行った。

龍宝寺 真言宗御室派

1186年伊達家の祖朝宗が再興し、自家の祈祷寺とした。その後福島、山形、宮城と伊達家と共に移動し、伊達政宗の仙台築城に伴って現在の地に移された。四代藩主 綱村が栗原市の福王寺にあった釈迦如来立像を龍寶寺の本尊として勧請した。住職が丁寧に境内を案内してくれた。お目当ての清凉寺式釈迦如来立像(重文)は来年1月16日からの東京国立博物館の特別展に出陳のため既にお出ましになっていた。宝形造の釈迦堂に上がり、釈迦如来の写真を見て空の厨子と両脇侍の普賢菩薩と文殊菩薩を拝観した。次に多宝塔を開けていただき、内部に入り、大日如来を中心に東に阿闍、南に宝生、西に無量寿、北に不空成就の五智如来を身近に拝観した。高野山の根本大塔を小さくした感じだ。見学を終え、仙台市を離れて多賀城市に向かった。

陸奥総社宮

陸奥国府多賀城に赴任した国司が多賀城東門の近くに合祀勧請したのが始まりとされている。鳥居をくぐり、社殿にお参りして社務所に入り、宮司から説明を聞いた。大伴家持は晩年に征東将軍に任じられ、当地で没したそう。境内を見て近くの多賀城碑に向かった。

多賀城碑(重文)

多賀城跡(特別史跡)の南門跡の近くにある。群馬県の多胡碑、栃木県的那須国造碑と共に日本三古碑の1つとされる。現在は水戸光圀のアドバイスにより建てられた宝形造の覆い屋の中にある。靱鞆国はすでに国号をあらため渤海と号していたことや各地へキロ数が合わないとかで偽物説があったが8世紀半ばに大規模な改修が行われていたことが発掘調査により新たに判明し、これを裏付けるものとして天平宝字6年(762)藤原惠美朝臣朝狩によって多賀城が改修されたことが記されており、本物と断定された。発見当初から歌枕の一つである壺の碑(ツボノイヅミ)として著名となった。覆い屋の後ろの方にある紅葉が素晴らしかった。

バスに戻り、塩釜市に向かった。

鹽竈神社

陸奥の国一宮、鹿島神宮祭神である武甕槌(タケミカヅチ)命・香取神宮祭神である経津主(フツヌ)神が東北を平定した際に両神を先導した塩土老翁(シヅチジ)神がこの地に留まり、現地の人々に製塩を教えたことに始まると伝えられる古社だ。江戸時代には伊達家の崇敬も厚かった。正式参道の急な階段は上らず、駐車場から斜めに歩き、参道両側の紅葉を眺めながら進んだ。参道の急な石段の上に入母屋造、銅板葺、三間一戸の楼門形式の隨身門(重文)がある。それを横に見て参道を進むと唐門(重文)がある。この門は切妻造の四脚門であり、どこにも唐破風が付いてなく唐門というのに変な気がした。まず右側に建つ塩土老翁神をまつる別宮の拝殿(重文)にお参りした。その後正面に建つ左右に武甕槌と経津主を祀る拝殿(重文)があり、お参りした。同じ境内にある志波彦神社は延喜式に名神大社とされている。現在は正式名称を「志波彦神社・鹽竈神社」とし1つの法人となっているそうだ。社殿(市指定)にお参りをし、あまり時間がないので急いでバスに戻り、松島に向かった。

昼食「松島浪漫亭」

松島海岸を前にした観光用の施設で二階が食事場所になっている。用意されていたのは「松島かき鍋膳」で鍋のほかに牡蠣フライ、刺身もあり、ビールを飲みながら美味しくいただいた。

食後歩いて瑞巖寺へ行った。以前は杉の木が鬱蒼とした参道であったが津波により枯れてしまい、何かさみしい気がした。

瑞巖寺

臨済宗妙心寺派(前身は天台宗。円仁が開創)828年慈覚大師円仁が松島に来て延福寺を建立したのに始まり、北条政子が仏舎利を寄進し、夫の菩提を弔わせ臨済宗となった。諸山の高位にあったが次第に衰退し、妙心寺派に属するようになり、関ヶ原の戦いの後伊達政宗が伽藍を建立し、現在に至る。切妻造、本瓦葺、薬医門形式の総門(県指定)をくぐり、庫裡(国宝)の前に来た。切妻造、本瓦葺、妻入で大屋根の上にさらに入母屋造の煙出をのせ、正面は千鳥破風の反りが美しい。庫裡に入ると高村光雲作の聖観音立像が迎えてくれた。回廊(国宝)を通り、本堂(国宝)に入った。

内部は禅宗方丈様式に武家邸宅の書院を加えた10室間取で、東・南・西三方に上縁・下縁を巡らしている。上段の間は藩主御成の間で黒塗框の豪壮な床の間・花頭窓・違い棚・武者隠(帳台構)を備えた書院造りで飾り金具がすばらしい。次に宝物館である青龍殿に入り、伊達家関連の絵画・茶器・墨跡、政宗甲冑像等を鑑賞した。テレビで見る政宗の右目には眼帯をしているがこの像はそれではなかった。庭に出て建物の外観を眺めた。本堂は入母屋造・本瓦葺で1609年に建てられた。南西端にある御成門(重文)は入母屋造、本瓦葺の薬医門で本瓦葺の袖塀が付き、格式が感じられる。見学を終え、五大堂に向かって歩いた。

五大堂(重文)

すかし橋(五大堂が建立された小島に架けられた橋)を渡ると橋桁の隙間から海が見え、五大堂へ行く際に足元を見て気を引き締めるために造られたと言われている。五大堂は1604年伊達政宗が造営した方三間、宝形造、本瓦葺の建物、東北地方最古の桃山建築だ。軒まわりの臺股に方位に従って十二支の彫刻が配してある。中の五大明王は秘仏であるが三井記念美術館で展示された時に拝観した。海は静かに凪いでおり、点々と見える沖の小島が美しく見えた。

すべての見学を終え、バスは一路仙台駅に向かった。二日間お天気も良く、あちこちで予期せぬ紅葉の盛りが見え、素晴らしい旅であった。